

ごあいさつ

このたび第 42 回山崎賞を受賞された皆さん、日頃より科学研究に熱心に取り組み、応募の上受賞されたこと、心よりお喜び申し上げます。また、受賞者の研究を様々な形で支援いただいた関係の皆さまにも、感謝申し上げます。

本年度は全体で 177 件の応募があり、昨年度に比べて 12 件の増となりました。特に、教員や学校の応募が減少したにもかかわらず、小・中・高校生の応募が 19 件増え、将来の科学・技術系人材の育成という観点から大変嬉しく思っているところです。結果として 66 件の研究に対して、ここに賞を授与することといたしました。

ここで、今回の応募に関して、いくつか感じたことを述べたいと思います。

一つは、科学研究の過程（科学的探究の過程）をきちんと踏まえた、説得力ある研究が多かったことです。科学研究の特色や強みは実証性と論理性、そして再現性にあり、その点で、受賞された研究では、実験や観察が繰り返され、時に実験装置を自作して、データに基づき丁寧に疑問が紐解かれていました。また、結果に基づいて新たな疑問が提示されている研究に対しても好感を持ちました。自然科学というものは、一つ疑問が解決されると、予想しなかった新たな疑問が生まれるものです。それらを逐次解決していく研究がありました。

二つ目は、上記と関係するのですが、複数年にわたる継続研究が多く目についたことです。研究対象への関心の高さとその継続性、研究への熱意の表れと思われませんが、これは私たちも歓迎するところであり、今後もそれら新しい成果を応募いただければと思っています。自然科学の研究には長い時間が必要とされます。そのほとんどの時間は失敗に費やされます。失敗から学びつつ、都度研究成果を発表・蓄積しながら前に進みます。同様の体験を皆さんにも経験いただきたいのですが、応募にあたっては、どこからが新しい取り組みで新たな知見なのかをきちんと示してください。そこを私たちは評価いたします。

最後は、私たちの生活環境の持続性に関する研究が多く目についたことです。いわゆる持続可能な社会の構築に関わる研究です。特に小中学生の研究にそれが多く見られました。自然科学研究の基盤を確かなものとする研究（基礎研究）は必須であり、私たちはそれを奨励いたしますが、同時に、危機的な状況にある自然環境を改善することは、今後の自然科学の向かう方向性として重要であると考えています。

このたびの山崎賞選考に関しては、佐田選考委員長をはじめ、22 名の先生方に審査をいただきました。研究レベルの高さを反映し、審査には例年になく多くの時間がかかりました。日頃多忙な中、審査に尽力いただいた先生方には、この場を借りて心よりお礼申し上げます、私からのご挨拶といたします。

令和 8 年 2 月 22 日

公益財団法人 山崎自然科学教育振興会
代表理事 丹沢 哲郎